

利他の意味を問う

—— メタ倫理学と規範倫理学のアプローチ ——

古川 範和

目次

1. 序論
2. 利他を巡る哲学的議論
 - (1) 近世～近代
 - (2) 近代～現代
3. 利他性の再定義
 - (1) メタ倫理的アプローチ
 - (2) 規範倫理的アプローチ
4. モラロジーにおける慈悲心と利他心の関係
5. 結論

1. 序論

本論は「道德とはいかなるシステムか」を問うメタ倫理学、並びに「道德というシステムの機能はいかに用いられるべきか」を問う規範倫理学の観点から、「利他」とは何か、またどうあるべきかを吟味するものである。第1に、「利他」を巡る従来の議論を概観する。第2に、近年の道德に関する科学的研究の結果¹⁾を参照し、「利他主義」と訳される英語“altruism”を、生物学的基盤を持つ心理的プロセスと捉え「利他心」と訳するのが適切であることを論じる。そして第3に、「他者を益するための自己犠牲」という一般的な定義が、「他」とは誰か、「利」とは何かの不確定性を通じ、議論の障害となってきたことを指摘した上で、利他心のより具体的な意味を提案する²⁾。

通常、人が「利他」という言葉で形容するのは、「自己の不利益をかえりみず、他者の利益のために行動すること」(大野 2016)であり「他者を益するための自己犠牲」のことであって、道德を考える上で重要な徳目である。しかしながら、一見すると利他的に見え

1) 立木 (2013) を参照。

2) 本論は公益財団法人モラロジー研究所道德科学研究センターにおいて平成 25 年度から 27 年度の 3 年間にわたって継続されたプロジェクト「利他性を考える」を通してまとめられたものである。『モラロジー研究』第 78 号には、同プロジェクトの特集が組まれている。

る行動は、時として利己的な動機（いわゆる下心）によって引き起こされることもあり、更には小山（2016）が指摘するように、ごく限定された対象を利用する「利他的」行動はそれ以外の他者に甚だしい危害を加える可能性さえ持っている（テロリズムはその典型といえる）。昨今世界中で台頭してきている保守主義・保護主義も、国籍や人種という範疇で同類に属する者同士の連携を強める運動であり、グループ内の動向に注視すれば利他性を認めることができようが、移民や難民、その他外国人の排斥等をその裏面に持つ以上、総体として利他的であるとは言い難い。同時に、過去数十年間にわたりグローバル化を推進してきた政策や言論も、市場への参画機会を世界に提供してきたという面では「利他的」であったかもしれないが、都市化や国際化の波に乗ら（れ）なかった人々は取り残されつつあり、こちらにも問題があったことは否めない。すなわち我々が「利他」という時、「利」とは何を、「他」とは誰を指すのかが必ず問題となるが、言及された「利」を好意的に受け入れられない立場からは「害他」と見做されかねず、また仮に「利他」と見做された場合でも、その「他」に含まれない者たちの羨望そして反発を招く可能性が常に存在する。

モラロジーの創始者・廣池千九郎も『道徳科学の論文』において、自己が所属するグループのみを利そうとする人間の傾向を指摘し、人間の持つ利他性の狭小となりがちであること、またその危険性について既に論じていた。上述した現在のいわゆる「右」と「左」の対立の次元において、利他性に関する考え方の齟齬が存するように考えられ、したがって利他を根底から問い直すことは大きな今日的意味を持っていると推察される。『社会はなぜ右と左に分かれるのか』（原題 The Righteous Mind）の著者ジョナサン・ハイト氏の議論が世界中で注目を浴びている事実³⁾が、それを物語っている。本論は、このような対立を超えるべく、近年提示されてきた諸学説を踏まえた上で、利他について再考し、新たな理解の枠組みを提供することを究極的な目標としている。そこでまず、考察の対象がこれまでどのように理解されてきたかを最初に確認しておこう。

2. 利他を巡る哲学的議論

(1) 近世～近代

現在知られている限り、通常「利他主義」と翻訳される仏語“altruisme”が活字として最初に登場したのは、社会学の祖とされるフランス人オーギュスト・コント（1798-1857）が1851年に出版した『実証政治学体系』（Systeme de Politique Positive）においてである。したがって通説ではコントがこの言葉を作ったことになっているが、実際に“altruisme”という言葉を用い始めたのはコントに読み書きを指導したフランソワ・アンドリュウ（1759-1833）という人物であったと示す資料が複数存在している。コントは自然史家ジョルジュ＝ルイ・ルクレール（1707-1788）の学説に基づき、「利己主義」と訳

3) 同氏は世界各国で講演を行っており、その模様は動画でネット上に公開されている。



Auguste Comte (1798-1857)



François Andrieux (1759-1833)

される egoisme とは真逆の、社会的動物が持っている本能を altruisme と呼んだが、この利他的本能は人間に至ってその真髄に達し、愛着 (attachment)、敬愛 (veneration)、慈愛 (benevolence) となって現れると考えた (Dixon 2008, 第 2 章)。

現代にいたるまで、道徳哲学者たちはこの「利他」が道徳にとって重要であることを一般に認めているが、「利他」とは何か、それをどのように説明すべきか、その範囲はどの程度かについて、意見の一致をみていない (Borchert 2006, "altruism")。「利他」と呼び得る概念に関連するものとして、まず道徳哲学者トマス・ホッブス (1588-1679) の議論がよく引き合いに出される。彼は「元来、人間は死の恐怖 (fear of death) と支配力への願望 (desire for dominance) のみによって突き動かされるために、人生は悲惨 (nasty, brutish, and short) となる」と考え、人生の悲惨さの原因である利己主義を抑える手段として利他性の重要性を説いた。しかし、人々は他者と助け合い、分かち合うことに喜びや積極的意味を見出し得るのであり、「万人の万人に対する闘争」(bellum omnium contra omnes) と彼が呼ぶこの世界観は、前提として必ずしも経験的に支持されうるものではない (Fukuyama 2011)。

中世の神学者トマス・アキナス (1224-1274) によってキリスト教の世界に導入されたアリストテレスの思想に基づき、イギリスの哲学者ジョセフ・バトラー (1692-1752) は、幸福な人生を送る条件として充実した人間関係を挙げた。自己の利益ばかりを追求しては良好な人間関係は維持できず、また自己を完全に犠牲にすることによっても幸福は実現しない。よって人生を幸福なものとするには自他の利益を調和させる必要がある。こうして利己と利他の対立は良好な人間関係の実現という形で超克される。バトラーにおいて、利他とは自己の幸福を実現するための手段であった。

デイヴィッド・ヒューム (1711-1776) は、愛情や共感こそが人間が他人を助ける動機

であると説明している。しかし、自分が愛情や共感を覚えない相手を助けないのであれば、大事にしているのは他者ではなく自分の感情ということになる。逆に、イマニュエル・カント（1724-1804）は『実践理性批判』において、人間は皆他者の助けを必要とするのだから全員が互いに助け合うのが道理であり、我々の義務はただこの道理に従うことのみであると結論づけ、慈善的な感情の必要を否定している。しかし、彼と同世代のアダム・スミス（1723-1790）が『道徳情操論』で説いたように、人間各自が他者に対する思いやりというものを一切持たず、ただルールに従って助け合うのでは、孤独や人間疎外という問題を解決し得ないだろう。

西洋以外の文化圏でも利他に関する議論は多く、特に商業における重要な徳目として、例えばインドのジャイナ教や日本仏教には多くの教説が存在する（芹川 2007）が、現代の道徳哲学の基礎をなすコントの“altruism”へ至る過程で、西洋においては凡そ上記のような議論がなされてきた（Roth 1995）。やがてコント以降の時代になると、自然科学や社会科学の発達に伴い、利他に関する議論は精緻化・複雑化していくことになる。

(2) 近代～現代

世俗化の進展により、道徳について「神と人」ではなく「人と人」の関係を扱う議論が活発に交わされるようになってから、altruism の定義的問題や実現可能性に関する多くの提言がなされてきており、枚挙に遑がないほどの論考が生み出されてきた（現在、Google で“altruism”を検索すると、ヒット数は160万件近くに達する）。一般的に「利他主義」と翻訳される“altruism”はその定義が抽象的であるため、その適用範囲を巡った議論が後を絶たない。ある人物の行為を「利他的」と評価できるか否かは、それをいかなる学問分野において検証するか（哲学、経済学、心理学、進化生物学、神経科学など）によって左右されることもあり得る。心理学者や進化生物学者が利他的であると思う行為も、経済学者は合理的な打算による行為だと考えるかもしれない。神経科学者に聞けば、人は利他的行動を通じて快樂を得ているというかもしれない、そこで哲学者は「ならばそれは結局利己的だ」と結論づけるかもしれない（岡部 2014）。

例えば、進化生物学者ロバート・L・トリバースは「利他的行動」(altruistic behavior) を「他者を益するために自己の利益を犠牲にする行為」と定義しているが、遺伝子を共有する集団の繁殖を目的とした「血縁選択」(kin selection) で説明できる近親者への援助は「利他的行動」とは呼べないと結論づけた (Trivers 1971)。更に、経済学者ジェイムズ・アンドレオニは、仮に血縁的な繋がりが極めて薄い他者への施しであっても、慈善的活動を行うことによって得られる名誉や「ほのぼのとした気持ち」(warm-glow) を目的として行われるならば、それは「不純な利他」(impure altruism) であると述べている (Andreoni 1990)。一方、「純粋な利他」の価値については、19世紀前半、すでに懐疑的な立場をとる論者が存在していた。仏人アレクシ・ド・トゥクヴィル (1805-1859) は『アメリカの民主主義』(De la démocratie en Amérique) の中で「啓蒙された利己」(self-interest rightly understood, 現代では enlightened self-interest と呼ばれる) を提唱してい

る。当時のアメリカでみられたように、人々が日頃から公益のために僅かな自己犠牲を払うことを習慣化すれば、普段は自己の幸福のみを追求しても差し支えなく、それはほとんど実行し得ない高尚な自己犠牲（純粋な利他）を説くよりも現実的で優れた道であると、彼は当時のヨーロッパ人たちに説いたのであった⁴⁾(Tocqueville 1997, 第2巻, 第8章)。

こうした様々な見解に現れているとおり、「利他」を「他者を益するための自己犠牲」のように漠然と定義した場合、次の2つの問題が発生する。

- (1) 他と己との関係が明確でなく、自己とある種の利害が一致する相手への支援も「利他」に含み得てしまう。トリバースは血縁選択を排除したが、友人や知人、その他自己に近い者への優遇は利他的といえるのか。
- (2) 「自己犠牲」が、実際に他者の利益を目的としたものであるのか、それとも「不純な自己」や「啓蒙された利己」に過ぎないのかを区別する基準がない。言い換えれば、慈善と慈善的行為は、明らかに異なる活動でありながら、二者の分別が成立しない。

「利他」という言葉に確固とした意味が与えられない限り、それについて建設的に論じることは不可能である。以下、この問題の克服を試みるために、まず「利他」というシステムの基盤が何であるかを検討し、その後それが何を意味し得るかを考察しよう。

3. 利他性の再定義

(1) メタ倫理的アプローチ

“Altruism”の意味を探るにあたり、今でこそ1990年代以降に始まった科学的手法を用い、より適確な答えに辿り着くことが期待できるが、それ以前の状況は大きく異なっていたことを簡単に確認しておこう。次に掲げる2つの理由により、20世紀の間、道德の問題は社会科学の独壇場となっており、自然科学者には手が付けられなかったという。すなわち、

- (1) 知的な風潮: 道德の基盤となる心理的事象が、物理的に説明できるという考え方が定着していなかったこと、
- (2) 技術的な限界: 現代のように生物学的諸分野が発達していなかったこと (DNAの二重螺旋構造がようやく確認されたのは、20世紀後半に入ってからであった) である⁵⁾。ところが20世紀の終盤になると、進化心理学や行動経済学のような分野の研究者たちが、諸民族間の道徳行動に類似性が存在することを突き止め、道徳の人類学的研究が盛んになっていった。また医学界においては、MRIやPETをはじめとする脳イメージング技術の開発が進み、人間の脳についてその構造のみならず機能まで研究できるようになった。こうした流れの中で、進化科学及び神経科学の立場からの「利他性や協力とい

4) ただし、教育を徹底しなければ「啓蒙された利己」は単なる利己へ墮落する、と警告している。

5) 廣池千九郎も当時の科学の限界に言及している（『道徳科学の論文』第1巻, 第1章, 第8項参照）。

ったことの究極的な起源に関する研究」が本格的に始まったという⁶⁾。

こうした背景を持つ最先端の科学的研究現場では、利他性に関して活発な議論が沸き起こってきている。「共感—利他性仮説」(empathy-altruism hypothesis)の提唱者でテネシー大学の名誉教授である社会心理学者C・ダニエル・バトソンは、「共感に誘導された利他性が、必ずしも道徳的行動を生み出すとは限らない……不道徳な行動を生み出す可能性すらある」と述べている。特定の他者に向けられた共感によって生ずる利他的行動は、対象の利益のみを不当に優遇する可能性があり、そのような行動は辞書的な意味における道徳すなわち「正しい行為の原理に従うこと」に反するので、利他性と道徳性を同等に扱うことはできないと結論している⁷⁾(J・フェアプレツェ他 2009, 第4章)。この仮説が経験的に支持されることは、依怙^{えい}最^{さい}眞^{しん}という不道徳の存在が証明してくれるだろう。

利他性と道徳性の関係を考える上でヒントとなる現象のひとつに「道徳ディレンマ」がある。ハーバード大学社会科学部准教授・同大学心理学部道徳認知研究所所長ジョシュア・グリーンは、複数の人々に迫っている危機を1人を犠牲にして回避することが許されるかなど、様々なディレンマに遭遇した時に人々が経験する葛藤を研究し、人間の道徳判断に2つのプロセス、すなわち①感情的反応(emotional responses)と②統制された認知(controlled cognition)が存在すると論じている。アメリカでは、人工妊娠中絶、同性愛結婚、銃規制などを巡るディレンマについて論争が続いているが、グリーンによれば、こうした論争が生じるのは、人々が自らの人生経験によって形成された①のプロセスを通じて自己主張をするからであるという。キリスト教徒である両親から生まれキリスト教徒のコミュニティの中で育った人物がキリスト教の価値観にもとづいて中絶や同性愛に反対することなどはその典型である(Greene 2013, Chs. 5 & 12)。

ブラジル・ラボスドール医療ネットワークに所属する2人の神経科学者リカルド・デオリヴェイラーソーサとジョルジュ・モルも、この問題について非常に重要な指摘をしている。人がある種の価値や規範、イデオロギーを持つメカニズムは、社会的動物が血縁者に対して抱くのと同一「愛着」であると彼らはいう。「国家への愛着」から生じる「愛国心」などは、愛着に基づいた規範の例として最も理解し易いだろう。しかし、自らの愛着の対象となっている徳目を実践することは、「集団内の利他性や協力を促進するだけでなく、集団の区別性を高め、外集団に対する攻撃性を強めて、外集団との境界を明確にすることもある——この悩ましい特徴は人類進化全般に浸透してきた」⁸⁾(J・フェアプレツェ他 2009, 第2章)。

これらの主張をまとめると、

- (1) 現代においては、進化科学や神経科学のアプローチにより、利他性を含む様々な徳目は、特定の神経系の機能という、生物学的基盤を持つ事象として理解されている、

6) J・フェアプレツェ他(2009)、序章を参照。同書のレビューに古川(2014)がある。

7) モラロジーにおける「三方よし」という考え方もこれと同じ視点に基づいている。

8) 廣池も愛国心が孕む危険性を鋭く指摘している(『道徳科学の論文』第14章、第9項、第7節参照)。

- (2) 共感、感情、愛着などに基づく利他性は、主体と同様の価値と共有する他者に対してのみ機能する利他性であり、その他の個人や集団に対しては利己性として表れる可能性がある⁹⁾、

ということになる。

こうした新しい理解に即して“altruism”について考え直してみよう。20世紀終盤以前まで道徳の研究の担い手が社会科学者たちであった以上、この言葉がイデオロギーを表すものと考えられ、「利他主義」と翻訳されたことも不思議ではない。しかし、利他性の本質に関する自然科学的理解が進んだ現代において、再検討が迫られるのは当然である。

そもそも、接尾辞“-ism”は「主義」と翻訳されることが多いが、本来はより幅広い用法を持っている¹⁰⁾。1933年に出版されたOxford English Dictionaryを見てみると、-ismの意味は大きく3つに分類されている。

- (1) 「動作を名詞化、プロセスの名称、完了した動作及びその結果を意味する」
例：agonism, aphorism, baptism, criticism, magnetism, mechanism, organism, etc.
(通常「～主義」とは翻訳されない)
- (2) 「宗教的、聖職的、哲学的、政治的、社会的な理念や活動の体系の名称を構成する」
例：Buddhism, Catholicism, conservatism, liberalism, Platonism, etc.
(しばしば「～主義」と翻訳される)
- (3) 「特に言語に関して、特異性や特徴を記述する単語を形成する」
例：Americanism, Anglicism, Hebraism, Latinism, Orientalism, etc.
(通常「～主義」とは翻訳されない)

Altruismはegoismと並んで(2)の中に「教理または原理の名称」として含まれている。それはこの辞書が編まれた時代、altruismがはまだ哲学的に論じられていたからであろうし、従って「利他主義」と翻訳されたのも、当時としては自然であったのかもしれない。

ところが、哲学や社会科学の中で扱われてきた様々な現象も、本質的に大脳生理学的なプロセスとして捉えられるようになった今、(2)に含まれている言葉のいくつかは、「プロセスの名称」として(1)の中に置き換えることが可能であり且つ妥当ではないだろうか。「社会哲学は、生物学によって完成される自然哲学に立脚すべきである」と論じたコントが実証主義的手法によって打ち立てようとした「人間科学」(science de l'humanité)が、

数学 → 天文学 → 物理学 → 化学 → 生物学 → 社会学
mathematics astronomy physics chemistry biology sociology

という発展的構造を持っており、また現代では生物学と社会学の間に心理学が存在する

9) 廣池もこの問題について言及している(『道徳科学の論文』第14章、第19項参照)。

10) そもそも、接尾辞“-ism”は「主義」と翻訳されることが多いが、本来はより幅広い用法を持っている。-ismの語源はギリシア語の-ismosである。-ismosは-izeinで終わる動詞の語幹と接続されることで名詞を形成する。例えば「浸す」を意味するbaptizeinの語尾を換えてbaptismosとすれば「浸すこと」となり、英語では「洗礼」を意味するbaptismとなる(Oxford English Dictionary 1933)。

——コントの最晩年にあたる 1850 年代、実験心理学の父ヴィルヘルム・ヴントはまだ学生であった——ことを考慮するならば、altruism はいわゆる主義としての ism ではなく、他の科学にならない、心理的「プロセス」としての ism として扱われるべきである。

諸科学におけるプロセスとしての -ism

Fields 領域	Phenomena 現象	Media 媒体	EX. of Processes プロセスの例
Physics 物理	Fundamental Interaction 起訴相互作用=力	(Elementary) Particles (素) 粒子	Electromagnetism 電磁力
Physiology 生理	Chemical Reaction 化学反応=化学変化	Atoms & Molecules 原子・分子	Metabolism (Catabolism & Anabolism) 代謝 (異化・同化)
Psychology 心理	Mental Function 精神機能=心	Neuronal Systems 神経系	Egoism / Altruism 利己心/利他心

物理学や生理学の用語の事例と同様、ism を即「主義」と訳してしまわずに、現象が生ずる領域に応じた語を用いることで、その意味を明快に理解することができよう¹¹⁾。“Altruism”は、利他「主義」と訳される場合、ある種の思想や教理を意味し得るが、主義であるならば人によって解釈が異なり得るため、決定的な定義を与えることは不可能である。これに反し、生理学的法則に裏付けられた心理的プロセスとしてならば、“altruism”という言葉に確固とした意味を与えることが可能となるだろう。したがって、心理学の対象となる現象すなわち「心」として、altruism は「利他心」と訳されるべきであろう。

そもそも、明治 14 年 (1881) に出版された『哲学字彙』の初版及びその 3 年後に出版された第 2 版においては、“altruism”には「愛他心」と「利他主義」の 2 つの訳語が当てられていた¹²⁾。当時、一般的には「愛他心」が多く用いられており、東京帝国大学第 2 代総長の加藤弘之が明治 20 年に出版した道德教育に関する意見書『德育方法案』の中でも「自然能的又全感的愛他心」、「感情的又道德教的愛他心」、「知識的又利害的愛他心」などの言葉が用いられている¹³⁾。ところが明治 40 年代以降になると、「愛他説」「愛他主義」「主他主義」などの言葉が用いられるようになった¹⁴⁾。元来、「主義」という言葉は“principle”の訳語として『哲学字彙』に採用された単語であったが、一方、接尾辞“-ism”の訳し方は現在と一致しておらず、例えば“communism”などは「共産論」とされていた。『哲学字彙』においてこれが「共産主義」とされたのは第 3 版 (明治 44 年、1911) からで、やはり明治 40 年代になってからのことであり、“altruism”が「主義」として捉えられるようになった頃と時を同じくしている¹⁵⁾。

ここに、心理的プロセスとしての altruism の訳語として、かつて用いられた愛他心と

11) 例えば、経済の用語である“capitalism”を「資本主義」と訳すならば、ある種の社会通念または教理であるかのような印象を与えてしまうが、「資本蓄積」のような訳語を用いれば、「所与の経済において各産業の所有者が利潤を生み続けるプロセス」であることが明確になる。

12) 井上他編 (1881, 1884) を参照。

13) 西谷 (1982) を参照。

14) 下中邦彦編 (1985) 『大百科事典』、「利他主義」の項目を参照。

15) 高野 (2004) を参照。

という言葉復活させるという考え方もあり得よう。しかし、既に述べたとおり「愛着」に基づく altruism の限界が指摘され、それを越えたものを模索しなければならない時代を我々が迎えている以上、やはり「愛他心」よりは「利他心」が用語として適切である。残された問題は、「利他心」とはどのような心を指すか、である。

(2) 規範倫理的アプローチ

主義や主張を異にする諸集団の対立から多くの社会問題が生じており、それらがグローバル化と共に広く伝播する現代においては、諸々の価値体系を越境して通用する普遍性を持っていなければ、「利他」は大きな意味を持ち得ないだろう。言い換えれば、「利他」の「他」の範囲が、時代に即して広がらなくてはならない。前述したハーバード大学のジョシュア・グリーンは、人類全体の幸福の増進を図る功利主義的立場から、異なる価値を持つ他者と交渉する際、人々は円満に折り合いをつけるために、自己の感情的反応を抑制し、理性的な思考によってコミュニケーションをとるべきであると主張している（こうした態度は、モラロジーにおける「自我の没却」という重要な徳目にも見られる）。自身の内在的な価値観を超えて（自我を没却して）人類全体を益する方法を模索する姿勢にこそ、普遍的な利他性を見出すことができるだろう。この意味において、我々はコント自身の唱えた altruism を乗り越えなくてはならない。彼は altruism の根拠を社会的本能 (social instincts) から派生する情緒 (feeling or heart) に求めたからである (Comte 1973, 第1巻)。

ここで「他者を益するための自己犠牲」と伝統的に定義される「利他主義」に対して、近年における研究者たちの発言や廣池千九郎による『道徳科学の論文』における議論を敷衍し改めて「利他心」を定義するならば、それは「人類全体の幸福を増進するために、自らの内在的価値を相対化し、異なる価値を持つ他者と協働する意志」¹⁶⁾ということになる。この新しい「利他心」の解釈では、

- (1) 「利他」の「他」が「全人類」を指していることが明確となっており、
- (2) 「自己の内在的価値に対する執着の放棄」（または自我の没却）という、精神的な犠牲が払われていることが明らかである、

という特質が備わっており、(2) で論じた伝統的な解釈に付随する問題を克服することができる。従来の用法にまわりついていた混乱を避けることができ、何を「利他心」と呼ぶべきかがこれで明確になる。

4. モラロジーにおける慈悲心と利他心の関係

モラロジーにおいては、最高道徳の慈悲心を「真の利他心」と定義している（竹中

16) ここでは控えめに「全人類」としたが、環境保護活動家や伝統的な仏教者の立場から考えた場合、「生きとし生けるもの全て」が対象となる。

2013)。廣池千九郎は、「忍耐」や「克己」などの「堅忍不拔の精神と行為」も「慈悲の心」より発するものでなければ道德とは認められないという¹⁷⁾。本論では利他心を、全人類の幸福を目的として自己の価値観への執着を離れる心という意味で用いることを提案しているが、モラロジーにおいては「人と人、人と社会、現在と過去、社会の情勢、国家の体制との『和』を実現し、自らの人生を充実した豊かなものとしていく」ため、人間には「慈悲寛大自己反省」という精神的態度が不可欠であることが指摘されている（井出2013）。

したがって、モラロジーにおける最高道德の慈悲心は、本論において定義された利他心の完成形として理解することができる。逆に、論点を最高道德に絞らず、より一般的な普通道德について語る場合には、慈悲心の代わりに利他心を論ずるとよいだろう。

5. 結論

本論では近年における道德の科学的研究が生み出した理論のいくつかに即し、利他性に関する学際的議論に概念的基礎を提供するため、(1) altruism を思想ではなく心理的プロセスと捉え、一般的な訳語としては利他「主義」よりも利他「心」が適切であると述べて、(2) 「人類全体の幸福を増進するために、自らの内在的価値を相対化し、異なる価値を持つ他者と協働する意志」という利他心の解釈を提案した。

今後、「利他」の意味について共通理解を深めていくためには、コント以降における“altruisme”という言葉の使用の歴史的展開を丹念に探ると共に、脳科学や心理学に基づいた「利他心とは何か」を巡るメタ倫理学的研究、人類学や社会学の知見をもとにした「利他心はどう働かせるべきか」を問う規範倫理学的研究、そして各分野でそれがどう実践されるべきかを具体的に考察する応用倫理学的研究を進めていくことが課題となろう。

参考文献

- Andreoni, J. (1989). Giving with Impure Altruism: Applications to Charity and Ricardian Equivalence. *Journal of Political Economy*, 97 (6), 1447–1458.
- Borchert, D. M., et al. (Eds.). (2006). *Encyclopedia of philosophy* (2nd. Ed.). MI: Thomson Gale.
- Comte, A. (1973). *System of Positive Polity* (John Henry Bridges, Trans., Vols. 1–4). New York: Lenox Hill Pub. & Dist. Co.
- Dixon, T. (2008). *The Invention of Altruism: Making Moral Meanings in Victorian Britain*. New York: Oxford University Press.
- Fukuyama, F. (2011). *The Origins of Political Order: From Prehuman Times to the French Revolution*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Greene, J. (2013). *Moral Tribes: Emotion, Reason, and the Gap between Us and Them*. New York: The Penguin Press.
- Preece, W. E., et al. (Eds.). (1966). *Encyclopedia Britannica*. London; Encyclopedia Britannica, Inc.
- Roth, J. K. (1995). *International Encyclopedia of Ethics*. Chicago: Salem Press Inc.

17) 『道德科学の論文』第1巻、第14章、第8節参照。

- Tocqueville, A. (1997). *Democracy in America* (ASGRP at the University of Virginia, Trans., Vols. 1-2). Document posted to http://xroads.virginia.edu/~HYPER/DETOC/toc_indx.html
- Trivers, R. L. (1971). The Evolution of Reciprocal Altruism. *The Quarterly Review of Biology*, 46 (1), 35-57.
- J・フェアプレツェ他著、立木教夫／望月文明監訳（2009）『モラルブレイン：脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』、麗澤大学出版会.
- 井出元（2013）「『最高道徳』と現代—『和』の思想の再発見—」、『倫理道徳研究フォーラム モラロジー研究』71号.
- 井上哲次郎他編（1881）『哲学字彙』、東洋館.
- （1884）『哲学字語 増補改訂版』、東洋館.
- 大野正英（2016）「利他性研究の意味—特集にあたって—」、『倫理道徳研究フォーラム モラロジー研究』78号.
- 岡部光明（2014）「利他主義（altruism）の動機と成立構造について」、『SFC ディスカッションペーパー』2014-002、慶応義塾大学湘南藤沢学会.
- 小山高正（2016）「利他的行動が病的変容を起こすとき」、『倫理道徳研究フォーラム モラロジー研究』78号.
- 芹川博通（2007）『いまなぜ東洋の経済倫理か—仏教・儒教・石門心学に聞く（増補改訂版）』、北樹出版.
- 高野繁男（2004）「『哲学字彙』の和製漢語—その語基の生成法・造語法」、『人文学研究所報』Vol.37.
- 竹中信介（2013）「『利他性』の人間学的研究～『超越性の原理』を手掛かりとして～」、平成25年度道徳科学研究センターゼミ『利他性を考える』、2013年9月3日.
- 立木教夫（2013）「認知神経科学と進化生物学の出会いが拓く道徳の科学的研究」、『倫理道徳研究フォーラム モラロジー研究』71号.
- 西谷成憲（1982）「加藤弘之『徳育方法案』に関する一考察」、『東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学』Vol. 33 pp. 73-86、東京学芸大学紀要出版委員会.
- 廣池千九郎（1985）『新版 道徳科学の論文』全11冊、廣池学園出版部.
- 古川範和（2014）「Moral-Science 2.0—『モラルブレイン：脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』を読む」、『倫理道徳研究フォーラム モラロジー研究』73号.

（キーワード：利他、進化、脳科学、メタ倫理学、規範倫理学）

